

# 聖光学院校友会報

聖光学院  
校友会発行

横浜市中区  
滝之上100番地  
聖光学院内  
☎045 (621) 2051  
発行人 吉永昌生  
印刷所  
神奈川新聞社

# 光輝く未来への扉 開かれる

## 新校舎竣工記念

## 小田和正氏コンサート



平成26年12月20日(土)、21日(日)の両日、新校舎の竣工記念行事が開催され、約1600人の卒業生が母校を訪れた。  
音響効果の優れたラ・ムネ・ホールで催された小田和正氏(3期)のコンサート。天井が高く、色彩豊かな椅子が並び食堂で行われた立食パーティー。卒業生にとって、すべてが忘れられない一日となった。

21日はあいにくの雨模様であった。しかし、新しくなった山手駅から坂を上る卒業生たちの足取りはいつもより軽いように見えた。写真で見ただけの新校舎をこの目で確かめたい。その思いが感じ取れた。  
午後3時、しばしの静寂の後、小田氏のコンサートが始まる。  
ピアノの繊細な音色が会場に響く。ステージ上の大画面には、「本日 聖光日和」のタイトル。そして、事前に新校舎を訪れた小田氏と、現役の在校生が触れあう映像が流れる。

「隣は誰だかわからない、前代未聞のコンサート。心配していたが、皆さんが和んでくれてよかった」と続けると、今度は大笑い。  
その後、小田氏は有名な曲を次々と演奏していく。会場はさらに、盛り上がりが増す。そして、再び静寂の後、小田氏は語りかける。  
「今日の行事の会費はコンサートとしては高めでありますが、会費のうちから、東日本大震災の被災地にいくばくかのお金が届きます。自分も3・11の後、一時、創作意欲を失いました。その後、作りたいと思ったのがこの曲です。」  
「その日が来るまで」を演奏し始めた。大画面には、被災地を巡り、被災者一人一人と触れ合う姿、聴衆のなかには涙をこぼす人もいた。その後は、「愛を止めないで」「ラプストロフィー」は突然に「などの大ヒット曲の演奏が続く。次第にコンサートは終盤へと入る。

「言いたいことはいっぱいあるんですが、最後に『やさしい雨』という曲をやります」小田氏は、この曲を切々と歌い上げた。  
会場の誰もがコンサート終わりを感ずる。卒業生は終了を惜しむつも、夢のようなひと時を振り返り、感傷にひたっていた。  
アンコール2曲目『My home town』の演奏が始まる。このとき、聴衆には

「この新しい校舎の設計は、同期の友達が担当した。『完成のときにはコンサートをしてくれ』という話がありました。卒業生が話したときは、ずいぶん先の話だと思いましたが、早くもその日がやってきました。感謝の無量であります」と叫ぶと、会場からは大歓声。

予期せぬ事態が起きた。いつも、プロとして完璧な演奏を続けている小田氏が声を詰まらせる。ピアノの弾き語りを中断し、大粒の涙をタオルで拭く。  
演奏の再開後、大画面には、旧校舎、開校当時の周辺のモノクロ写真が映し出される。そして、最後に、約50年前の聖光祭で、旧ラ・ムネ・ホールのステージに立つ小田氏の写真。

新校舎竣工という大きな節目を迎えたこの聖光学院こそ、3期生の小田氏にとつては音楽活動の原点であり、個々の卒業生にとつてもまた、それぞれの原点である。それを改めて感じさせた「予期せぬラスト」に惜しめない拍手が送られ、コンサートは幕を閉じた。  
午後5時10分、コンサートが終わると食堂に会場を移し、立食パーティーが始まった。久しぶりに顔を合わせた卒業生たちが昔話に花を咲かせる。  
そこに、小田氏がふらつと現れた。会場には、どよめきとともに、人だかりができる。はにかみながら、花束を受け取る小田氏は涙を拭いた。ステージ上とは違い、リラックスしていたようにも見えた。

「聖光学院に学び、卒業したことを誇りに思える」貴重な機会を与えてくれた、理事長・校長の工藤誠一先生をはじめとする先生方はもちろん、職員の皆様方、新校舎の建設に携わったすべての方々に感謝の思いがあふれる、そんな一日であった。

## 半世紀ぶりのありがとう

校長 工藤 誠一



2014年の暮れも押し迫った28日、私は午前6時32分東京発のはやぶさ1号に乗りこんだ。盛岡から新花巻へ戻り、釜石線快速「はまゆり1号」で釜石に向かい、そこから車で大槌町に向かった。

大槌町は人口15,000名の町である。そしてあの震災と津波で1,232名の方々の命が奪われてしまった。大槌町に限らず、東日本大震災ではたくさんの方々の尊い命が奪われたのである。  
この道を通った  
ここで夢を見ていた  
小田和正  
[My home town]  
被災地では数多くの学校が津波の被害に遭い、校舎が流され、若者たちの命も奪われた。通学路をともし

新しい校舎が建てられ、11年6月に宮古市の被災地にボランティアのたぬみ当分の高校1、2年生と私も出かけ、その折には大槌町にも足を延ばした。あれから三年が経過し、復興は進みつつあることは見て取れる。だが空地も目立ち、いまだに津波の爪痕が残っているのが現状である。仮設の住宅もまだまだたくさん残っており、そこに住んでおられる方々の大多数は高齢者である。

今回の訪問は、本校の新校舎竣工記念で行った卒業生である小田和正さんのコンサート会費の一部をお届けすることが目的であった。

今はそのまよふつきり元気がなくなって君の好きなふるさとの町にまたあの日々が戻ってきますように  
小田和正  
「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。

「聖光学院に学び、卒業したことを誇りに思える」貴重な機会を与えてくれた、理事長・校長の工藤誠一先生をはじめとする先生方はもちろん、職員の皆様方、新校舎の建設に携わったすべての方々に感謝の思いがあふれる、そんな一日であった。

「この新しい校舎の設計は、同期の友達が担当した。『完成のときにはコンサートをしてくれ』という話がありました。卒業生が話したときは、ずいぶん先の話だと思いましたが、早くもその日がやってきました。感謝の無量であります」と叫ぶと、会場からは大歓声。

「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。

「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。

「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。

「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。

「その日が来るまで」  
また、このほかに「桜の下にたくさん笑顔が集まる、その日が来るまで」という、「東北さくらライブプロジェクト」にも寄付をすることにした。